## クロロスルホン化ポリエチレンとフッ素樹脂との 加硫接着技術の開発

伊	藤	信	行
弘	中	常	雄
中	村	英	好
佐	藤		保

## Development of Cure Bonding between Chlorosulphonated Polyethylene (CSM) and Fluoroplastics

Nobuyuki ITO Tsuneo HIRONAKA Hideyoshi NAKAMURA Tamotsu SATO

Chlorosulphonated polyethylene (CSM) is utilized for automotive fuel hoses, where the CSM resin constitutes an outer layer covering, protecting an inner nitrile rubber layer from deterioration by heat, weather or ozone.

Recently, the Low-Emission Vehicle (LEV) Program came into force in California because of increasing environmental problems. An amount of volatile hydrocarbons emitted from motor vehicles is under strict control by law. Thus, car manufacturers intend to use the fluoroplastics in fuel hoses to reduce evolution of volatiles. The fluoroplastics are expensive and lack plasticity enough for use in hoses, so the multi-layered hoses have been proposed, in which the inner fluoroplastic layer is covered with the outer synthetic rubber layers. However, there is still no satisfactory cure bonding available between the fluoroplastics and synthetic rubbers.

We have studied the cure bonding between CSM and a fluoroplastic (terpolymer of tetrafluoroethylene, hexafluoropropylene and vinylidene fluoride) to apply CSM as a covering material for the inner fluoroplastic layer. In this article, we report development of a new cure bonding system based on CSM of low sulfur content, which has realized good cure bonding with the fluoroplastics enough for practical use.

#### 1.はじめに

クロロスルホン化ポリエチレン(CSM)は、ポリ エチレンを塩素化ならびにクロロスルホン化して製造 される特殊合成ゴムである<sup>1)</sup>。当社は1983年の企業化 以来、TOSO·CSM<sup>R</sup>、extos<sup>R</sup>の商品名でCSMの製造 及び販売を行ってきた。製造プロセスにおける使用溶 剤であった四塩化炭素がオゾン層破壊規制物質に指定 されたことから、1994年に溶剤代替による環境に優し いプロセスへの転換を実施し<sup>2)</sup>、事業を継続している。 TOSO-CSM<sup>R</sup>、extos<sup>R</sup>は、耐オゾン性、耐候性、耐 薬品性、明色性などに優れることから自動車用ホース、 ガスホース、工業用ホースなどホースのカバー材、電 線被覆、引布、パッキン、ガスケット、ロールあるい はライニングとして各種工業用部品に使用され、また 日常品としてはゴムボート、ライフジャケット、ウイ ンドブレーカー、エスカレーター手摺などに使用され ている<sup>3) 4)</sup>。TOSO-CSM<sup>R</sup>より耐寒性、動的特性に優 れるextos<sup>R</sup>は、自動車用ベルト及びブーツなどにも使 用されている<sup>5) 6) 7)</sup>。 これら用途の中で、自動車用燃料ホースにおける内 層ニトリルゴムの外層材として、CSMが使用されて きた。近年の環境問題から、ローエミッションビーク ル規制が施行され、車一台から排出される炭化水素量 が制限され始めた。これに対し、自動車メーカーでは 揮発性の高いガソリンの揮散抑制のため、耐燃料油透 過性に優れたフッ素樹脂を内層に使用した燃料ホース を開発している。

フッ素樹脂は価格が高くて硬いので、フッ素樹脂層 を薄くし内層として用い、外層に合成ゴムを用いる積 層体が提案されている。しかしフッ素樹脂と合成ゴム の十分満足できる加硫接着はこれまで実現されていな い。

本報では、CSMをフッ素樹脂製ホースの外層へ適応するため、CSMとフッ素樹脂として代表的に用いられるテトラフルオロエチレン・ヘキサフルオロプロ ピレン - ビニリデンフルオライド共重合体(THV) との加硫接着技術を検討した。

#### 2.CSMとTHVの加硫接着

加硫接着は加硫系の選択が非常に重要である。エピ クロルヒドリンゴムとTHVとの加硫接着には、1,8・ジ アザビシクロ[5.4.0]ウンデセン・7(DBU)塩等の強塩 基性化合物を使用する加硫系の適用が検討されてい る<sup>8)</sup>。一方、塩素化ポリエチレンでは強塩基性化合物 のジシクロヘキシルアミン・2・メルカプトベンゾトリ アゾール塩を加硫促進剤として、加硫剤にトリチオシ アヌル酸(TCA)を用いた加硫系が知られている<sup>9) 10) 11)</sup>。

これらを利用すれば、クロロスルホン基のない CSMでは、Scheme 1に示したようにTHVとの加硫接 着が期待できる。しかし、この加硫系をクロロスルホ ン基を有するCSMに利用した場合Scheme 2に示した ようにクロロスルホン基とDBU塩等の強塩基性化合 物との反応性が強いため、混練中CSMの架橋反応進 行により未加硫配合物の粘度が高くなり、THVとの 積層成型が困難である。

本報では、まず、クロロスルホン基の無NCSMを



Scheme 1 Cure bonding reaction of CSM (non-chlorosulphonated resin) and THV induced by TCA



Scheme 2 Vulcanization of CSM by TCA

Table 1 Properties of CSM

	Chlorine (wt <b>%</b> )	Sulfur (wt <b>%</b> )	Mooney viscosity ML(1 + 4)100	Remark
CSM-1	40	0	60	TOSO-CSM-NS CN-5020
CSM-2	35	0	105	Labo-scaled sample
CSM-3	35	1.0	55	TOSO-CSM TS-530
CSM-4	36	1.0	105	TOSO-CSM TS-930
CSM-5	35	0.3	85	Labo-scaled sample

用い新加硫系を探索し、その加硫系をクロロスルホン 基を有するCSMへ適用するという2ステップにより THVとの加硫接着技術を検討した。

#### 3.実験

#### [1]ポリマー

本研究に用いたCSM・1、CSM・2は、塩素ガスを塩 素化剤として用い溶液法にて合成した<sup>12)</sup>。CSM・3 ~ CSM・5は、塩化スルフリルを塩素化剤及びクロロス ルホン化剤として用い溶液法にて合成した<sup>1) 13)</sup>。 CSM・1 ~ CSM・5**の特性を**Table 1 に示した。

#### [2] 配合試薬

#### (1) DBU塩の合成方法

合成に使用した試薬は、市販品を使用した。本研究 に使用したDBU・安息香酸塩は、メタノールに安息香 酸を溶解後、室温で等モルのDBUを滴下し溶媒を留 去後、THFで洗浄し乾燥することにより得た。DBU・ トリメリット酸塩は、メタノールにトリメリット酸を 溶解後、室温で等モルのDBUを滴下し溶媒を除去後 2・プロパノールを加え結晶化させ、ろ過乾燥すること により得た。DBU・ピロメリット酸塩は、メタノール にピロメリット酸を溶解後、室温で等モルのDBUを 滴下し析出した結晶をろ過乾燥することにより得た。 合成した化合物は、<sup>1</sup>H・NMR分析によりDBUと各酸 成分の比が1対1の塩であることを確認した。

#### (2) その他配合試薬

その他配合試薬は市販品を使用した。一覧をTable 2に示した。

#### [3] フッ素樹脂(THV)

THVとしてDYNEON社製THV-500Gを使用した。 温度200 、圧力15MPa、10分で厚さ0.5mm、長さ 150mmの正方形状のシートにプレス成型し、加硫接 着試験における被着体とした。

[4] 測定

#### (1) DBU塩の融点測定

柳本製作所株式会社製MICRO MELTING POINT APPARATUSを用い、10 /1分の昇温速度で目視にて

Table 2 List of additives

Magnesium oxide (MgQ)	KYOWA MgQ150 (Kyowa Chemical Industry Co. Ltd)
Polvethylene wax	ACPE617A (Allied Signal Inc)
Polyethylene glycol (PEG)	Polyethylene glycol 4000 (Wako Pure Chemical Industries, Ltd.)
Specialty processing aids (40MS-F)	Structol 40-MSF (S&S JAPAN Co., Ltd.)
Carbon black SRF (SRF)	Seast S (TOKAI CARBON CO., LTD.)
Carboon black MT (MT)	Thermax MT(Lehmann&Voss&Co.)
Hydrous silica	Nipsil VN3 white carbon (TOSOH SILICA CORPORATION)
Di(2-ethylhexyl) sebacate (DOS)	SANSOCIZER DOS(New Japan Chemical Co.,Ltd.)
Alkyl naphthalene resin	RESITAX A-2(Mitsui Mining Chemicals Co.,Ltd.)
Sodium acetate trihydrate (CH <sub>3</sub> COONa • 3H <sub>2</sub> O)	Sodium acetate trihydrate (Wako Pure Chemical Industries,Ltd.)
Calcium acetate monohydrate ((CH <sub>3</sub> COO) <sub>2</sub> Ca · H <sub>2</sub> O)	Calcum acetate monohydrate (Wako Pure Chemical Industries,Ltd.)
Calcium sulfate dihydrate (CaSO <sub>4</sub> • 2H <sub>2</sub> O)	Calcium sulfate dihydrate (Wako Pure Chemical Industries,Ltd.)
Sodium acetate (CH <sub>3</sub> COONa)	Sodium acetate (Wako Pure Chemical Industries,Ltd.)
Trithiocyanuric acid (TCA)	NOCCELER TCA (OUCHI SHINKO CHEMICAL INDUSTRIAL)
Tetra-n-butylphosphonium benzotriazolate (PB)	ZeonetPB (Nippon Chemical Industrial CO.,LTD.)
1,8-Diazobicyclo 5.4.0 Jundec-7-ene formate (DBU formate)	U-CAT SA603 (SAN-APRO LTD.)
1,8-Diazobicycld 5.4.0 Jundec-7-ene phenolate (DBU phenolate)	U-CAT SA1 (SAN-APRO LTD.)
1,8-Diazobicycld 5.4.0 Jundec-7-ene octylate (DBU octylate)	U-CAT SA 102 (SAN-APRO LTD.)
1,8-Diazobicycld 5.4.0 Jundec-7-ene $p$ -toluenesulfonate (DBU $p$ -toluenesulfonate)	U·CAT SA 506 (SAN·APRO LTD.)
1,8-Diazobicycld 5.4.0 Jundec-7-ene phenol novolac resin salt (DBU phenol novolac resin salt)	U·CAT SA 841 (SAN·APRO LTD.)

融点を測定した。

#### (2)ポリマー分析

CSMの塩素量は、CSMを酸素燃焼法にて硫酸ヒド ラジニウム水溶液に吸収させ、京都電子株式会社製 AT・610を用い硝酸銀水溶液による電位差滴定法によ り塩素イオンを定量し測定した。CSMの硫黄量は、 CSMを酸素燃焼法にて過酸化水素水に吸収させ、水、 酢酸、2・プロパノールで希釈した後、アルセナゾを 発色試薬として用い京都電子株式会社製AT・610を用 い酢酸バリウム溶液による光度滴定法により硫酸イオ ンを定量し測定した。

CSMのムーニー粘度については、JIS K 6300(2001 年)に準拠し、株式会社島津製作所製SMV-200を用 い100 でL形ローターを用い予熱1分、ローター始 動後4分の粘度を測定した。

#### (3) 加硫接着性試験

配合処方に従いCSMと配合試薬をJIS K 6299(2001 年)に準拠し8インチオープンロールにより混練し、 厚さ2mm、長さ150mmの正方形のシート状に成型し た未加硫配合物を得た。未加硫配合物シートとTHV シートを張り合わせた後、160 で15MPaの圧力下プ レスにより、もしくは加硫缶(160 、圧力0.64MPa) 中でスチームを使用することにより加硫接着した。得 られたCSM加硫物とフッ素樹脂の積層体を23 で24 時間放置後、幅25.4mm、長さ150mmの短冊状に打ち 抜き、試験片とした。

剥離強度は、株式会社オリエンテック社製引張試験 機RTM・500を用い、50mm/minの速度でT形剥離試験 により測定した。

燃料油浸漬後の剥離強度は、試験片をFuel C (イソ オクタン/トルエン=50/50Vol%)に23 で48時間浸 漬後、23 で24時間自然乾燥し、更に24時間減圧乾燥 した。剥離強度は、株式会社オリエンテック社製引張 試験機RTM・500を用い、50mm/minの速度でT形剥離 試験により測定した。

#### (4) 未加硫物性及び加硫ゴム物性

未加硫配合物のムーニー粘度とムーニースコーチタ イムは、株式会社島津製作所製SMV・200を用いJIS K 6300(2001年)に準拠し測定した。未加硫配合物の加 硫特性は、JIS K 6300(2001年)に準拠しモンサント 株式会社製Rheometer 100Sを用い、160 、10分後お よび25分後のトルク値M10及びM25により評価した。 加硫ゴムの力学特性は、JIS K 6251(2004年)に従い、 ダンベル状3号形の試験片を、株式会社オリエンテッ ク社製引張試験機RTM・500を用い、引張速度 500mm/minにて23 で測定した。硬さは、JIS K 6253(1997年)に従い測定した。加硫ゴムの耐熱老化 性は、JIS K 6257(2003年)に従い上島製作所株式会 社製ギヤー式老化試験機を用い120 、72時間の老化 条件により評価した。圧縮永久歪性はJIS K 6262 (2006年)に従い上島製作所株式会社製ギヤー式老化 試験機を用い120 、72時間の老化条件により評価し た。耐燃料油性は、JIS K 6258(2003年)に従いFuel C(イソオクタン/トルエン= 50/50Vol%)に23 で 48時間浸漬後の体積変化率を測定した。

加硫ゴムの耐オゾン性は、JIS K 6251(2004年)に 記載のダンベル状1号形試験片を、スガ試験機株式会 社製オゾンウェザーメータOMS-HVCRを用い、JIS K 6259(2004年)に従い、オゾン濃度100pphm、温度40 、 最高引張歪み量30%、0.5Hzの条件で所定の時間後の 亀裂の状況を観察した。

#### 4.結果及び考察

- [1] クロロスルホン基のないCSMを用いた加硫系の 検討
- (1) 加硫促進剤の検討

CSM-1(硫黄量0wt%、塩素量40wt%)を用い、加 硫剤にTCA、加硫促進剤として種々の強塩基性化合物 を用いTHVとの加硫接着性を検討した。検討結果を Table 3 に示した。

すべての加硫促進剤において、剥離状態が界面剥離 もしくは部分ゴム破壊であり、加硫接着性は不十分で あった。クロロスルホン基の無いCSMでは、THV層 とCSM配合物層の相互作用が弱いことが原因と推測 される。

加硫促進剤としてテトラ・n・プチルホスホニウムベ ンゾトリアゾレート (PB)を変量した場合の試験結 果をTable 4に示した。PBの添加量を増しても剥離強 度及び剥離状態ともに改善が認められなかった。

またTable 3及びTable 4に示した様に、プレス加硫 よりスチーム加硫の方がTHVとの加硫接着において 剥離強度が大きいことから、加硫接着性に水分が効果 を及ぼすことが推察された。

#### (2)含水化合物の検討

加硫剤としてTCA、加硫促進剤としてPBを用い、 種々の含水化合物を添加した場合のTHVとの加硫接 着性の検討結果をTable 5に示した。酢酸ナトリウム

## 3水和物の添加により、剥離強度が大きくなり、剥離 状態も界面から部分ゴム破壊に改善されていることか ら、加硫接着性が大幅に向上することがわかった。酢

## 酸ナトリウム3水和物以外の含水化合物の添加では加 硫接着性はほとんど向上しなかった。これらの含水化 合物は結晶水放出温度が低いため、放出した水分が酸

Table 3 The effect of various vulcanization accelerators on cure bonding with fluorinated resin<sup>a)</sup>

Vulcanization	n accelerator		PB	DBU phenolate	DBU octylate	DBU <i>p</i> -toluensulfonate	DBU formate	DBU phenol novolac resin salt
	cure time	(min)	30	40	40	40	40	60
Press cure	peel strength	(N/mm)	0	1.4	1.1	0.9	2.9	0.9
	failure mode		interfacial	interfacial	interfacial	interfacial	interfacial	interfacial
Steam cure	peel strength	(N/mm)	2.4	4.6	2.3	3.4	4.7	2.9
	failure mode		interfacial	partially rubber	partially rubber	interfacial	partially rubber	interfacial

 $^{\rm a)}$  Cure bonding with fluorinated resin (THV500G) at 160  $\,$  .

Rubber	compound	ratio	(parts)	

CSM-1	100
MgO	20
Polyethylene wax	3
SRF	30
Hydrous silica	10
DOS	20
Alkyl naphthalene resin	5
TCA	2
Vulcanization accelerator	2

Table 4 The effect of amount of PB on cure bonding with fluorinated resin<sup>a)</sup>

PB (parts)			1	2	4
Press cure	peel strength	(N/mm)	0	0	1.9
	failure mode		interfacial	interfacial	partially rubber
Steam cure	peel strength	(N/mm)	2.8	2.0	2.1
	failure mode		interfacial	interfacial	partially rubber
<sup>a)</sup> Cure bonding	with fluorinated	resin (THV500G	6) at 160 for 4	0min.	
Rubber compo	ound ratio (parts	)			
CSM-1		100			
MgO		20			
Polyethylene	wax	3			
SRF		30			
Hydrous silid	a	10			
DOS		20			
Alkyl naphtha	alene resin	5			
TCA		2			
PB		variable			

Table 5 The effect of various salt hydrates on cure bonding with fluorinated resin<sup>a)</sup>

Additive		additive-free	CH <sub>3</sub> COONa•3H <sub>2</sub> O	(CH <sub>3</sub> COO)	)2Ca•H20	CaSO <sub>4</sub> •2H <sub>2</sub> O	CH₃COONa
Disapperance temperature of hydrate	( )	-	12014)	100	15)	10016)	-
Amount	(mol/CSM 100g)	-	0.02	0.02	0.06	0.06	0.02
Peel strength	(N/mm)	0	2.5	0.1	0.5	0.8	0.4
Failure mode		interfacial	partially rubber	interfacial	interfacial	interfacial	interfacial

 Press cure bonding with fluorinated resin (THV500G) at 160 for 40min. Rubber compound ratio (parts)

i (u		puitoj
C	SM - 1	100
Μ	gO	20
Po	lyethylene wax	3
SF	₹F	30
H	ydrous silica	10
D	OS	20
Al	kyl naphthalene resin	5
T	CA	2
PI	3	2
A	ditive	variable

Amount of sodium acetate	trihydrate	(parts)	0	1	2	4
Peel strength Failure mode		(N/mm)	2.2 interfacial	3.4 partially rubber	3.6 rubber	3.3 rubber
<ul> <li><sup>a)</sup> Press cure bonding with f Rubber compound ratio (p</li> </ul>	luorinated resin	(THV500G) at	t 160 for 40r	nin.		
CSM-1	100					
MgO	20					
Polyethylene wax	3					
SRF	30					
Hydrous silica	10					
DOS	20					
Alkyl naphthalene resin	5					
Sodium acetate trihydrate	variable					
TCA	2					
DBI I formate	2					

Table 6 The effect of amount of sodium acetate trihydrate on peel strength<sup>a)</sup>

化マグネシウムに吸収され、加硫反応時に有効な水分 が不足したためと推測した。

加硫剤としてトリチオシアヌル酸、加硫促進剤とし てDBU・ギ酸塩を用い、酢酸ナトリウム3水和物の変 量試験を行なった結果をTable 6に示した。酢酸ナト リウム3水和物の増量に伴い剥離強度が増大し、剥離 状態も界面破壊からゴム破壊に変わることから、加硫 接着性が改善されることがわかった。酢酸ナトリウム 3水和物の2重量部以上の添加で加硫接着における剥 離状態がゴム破壊となり、充分な接着性を示した。

#### [2] CSMとTHVの加硫接着技術の開発

### (1) 高融点の強塩基の塩を加硫促進剤に用いたとき のCSMの加硫機構

Scheme 3に示した様に、我々が見出した新加硫系 で用いた加硫促進剤(強塩基の塩)は融点以上で解離 し加硫促進作用を示すと考えた場合、混練・成型時の 最高温度(130)と加硫時の最低温度(150)の間 の融点をもつ強塩基の塩の使用により、混練・成型中 のCSMの架橋反応が抑制され成型が可能となる。ま た、加硫温度では加硫促進作用により架橋反応が進行 すると考えられ、CSMとTHVとの積層体における加 硫接着反応が期待できる。

# (2) DBU·ギ酸塩より高い融点を有する加硫促進剤の 検討

CSM・3(硫黄量1.0wt%、塩素量35wt%)を用い、 DBU・ギ酸塩より融点の高いDBU塩を加硫促進剤とし て使用した場合の、CSMの加硫反応性とTHVとの加 硫接着性の検討を行った。結果をTable 7に示した。 130 以下の融点を有するDBU・ギ酸塩及びDBU・安息 香酸塩は、未加硫配合物の粘度が非常に高く混練・成 型が困難であった。強塩基性化合物と架橋点であるク ロロスルホン基の反応が非常に速く起こるので、配合 物粘度が高くなったと推測した。130 以上の融点を 有するDBU・トリメリット酸塩及びDBU・ピロメリッ ト酸塩を使用すると、未加硫配合物の粘度が低くなっ たが、THVとほとんど加硫接着しなかった。用いた DBU・ピロメリット酸塩は融点が高すぎたこと、及び DBU・トリメリット酸塩は強酸を使用しており、DBU の塩基性が低下したためと推測した。



# Scheme 3 Assumed cure bonding of CSM and THV, induced by strong base of high melting point as a vulcanization accelerator.

0	7
J	1

Vulcanization accelerator		DBU formate	DBU benzoate	DBU trimellitate	DBU pyromellitate
Melting point	( )	< 40	100	140	200
Mooney viscosity	(ML(1)125)	> 200	158	52	47
Vulcanization properties	(160)				
Torque of vulcanizate	(dN•m)				
After 10 min		> 200	99	40	17
After 25 min		> 200	> 200	40	17
Peel strength	(N/mm)	_ c)	_ c)	0	0
Failure mode				interfacial	interfacial

Table 7 The effect of various accelerators on the properties of uncured compound, vulcanization, and cure bonding<sup>a)</sup>

a)	Rubber compound ratio (parts)	
	CSM-3	100
	MgO	20
	Polyethylene wax	2
	PEG	2
	40MS-F	3
	Alkyl naphthalene resin	5
	SRF	100
	DOS	40
	Sodium acetate trihydrate	2
	Vulcanization accelerator	3.2
	TCA	2

<sup>b)</sup> Steam cure bonding with fluorinated resin (THV500G) at 160 for 10min.

<sup>c)</sup> Uncured rubber could not be molded due to high viscosity.

Table 8 The property of new CSM compounds as material for automotive fuel hose cover<sup>a)</sup>

		CSM-5	Target
Chlorine	(wt <b>%</b> )	35	
Sulfur	(wt <b>%</b> )	0.3	
Mooney viscosity	ML(1+4)100	85	
Property of unvulcanized rubber			
Mooney viscosity		41	
Scorch time		14.9	
Cure bonding with THV500G (steam cured	1)		
Peel strength	(N/mm)	7.0	>2
Failure mode		rubber	rubber
After dipping in fuel C oil at 23 for 48 h			
Peel strength	(N/mm)	3.9	>2
Failure mode		rubber	rubber
Property of vulcanizate (press cured at 160	) for 40 min)		
Tensile properties			
Hardness	(JIS-A)	56	60~70
Tensile strength	(MPa)	13.5	>7
Elongation at break	(%)	570	> 200
100% Tensile stress	(MPa)	1.84	
Heat aging at 120 for 72h			
Change in Hs	(point)	+7	<b>&lt; +</b> 10
Change in TB	(%)	- 1	
Change in EB	( <b>%</b> )	- 35	- 40 ~ 0
Fuel C oil resistance at 23 for 48h			
Change rate in volume	( <b>%</b> )	57	
Compression set	(%)	56	0~50
Ozone resistance property (steam cure)			
atter 360 h		no crack	no crack

<sup>a)</sup> Rubber compound ratio (parts)

	CSM
CSM-5	100
MgO	20
Polyethylene wax	2
PEG	2
40MS-F	3
MT	80
DOS	40
Alkyl naphthalene resin	5
Sodium acetate trihydrate	2
TCA	2
DBU phenolate	2.5

(3)低クロロスルホン基含有CSMとTHVの加硫接着
 検討

架橋点であるクロロスルホン基を減量すればCSM の架橋反応が遅くなり、配合物粘度の上昇速度が遅く なると考えた。そこで、ムーニー粘度を105に合わせ たCSM・2(硫黄量0wt%、塩素量35wt%)とCSM・4 (硫黄量1.0wt%、塩素量36wt%)のポリマーブレンド によりクロロスルホン基(硫黄)量を変量した場合の CSMの加硫特性とTHVとの加硫接着性を調べること により、最適な硫黄量の把握を行った。加硫促進剤は、 クロロスルホン基のないCSM・1でTHVとの加硫接着 性が良好であった、DBU・ギ酸塩とDBU・フェノール 塩を用いた。

結果をFig. 1に示した。加硫剤としてTCA及び接着 向上剤として酢酸ナトリウム3水和物を使用した場 合、硫黄量0.4wt%以下で、未加硫配合物の粘度が低く 厚さ2mmシートへの成型が可能となり、THVとの加 硫接着における剥離強度は大きかった。加硫促進剤と してDBU・フェノール塩の方が、DBU・ギ酸塩より配 合物粘度が低く、厚さ2mmのシート状への成形性が 良好であった。両化合物の塩基性差によるものと推定 される。



Fig. 1 The effect of sulfur content of CSM on the cure bonding property and viscosity of rubber compounds, steam cured at 160 for 40min. : DBU formate (2 parts); : DBU phenolate (2.5 parts)

Rubber compounding ratio (parts)

CSM-4 (Sulfur content 1.0wt%)	30	40	50	60
CSM-2 (Sulfur content 0wt%)	70	60	50	40
MgO	20	20	20	20
SRF	100	100	100	100
DOS	40	40	40	40
Sodium acetate trihydrate	2	2	2	2
DBU salts	indicated on the caption			
TCA	2	2	2	2

#### [3]CSMの物性

上記結果より硫黄含量0.3wt%であり、ホースの押 出し成形性を考慮してムーニー粘度を85としたCSM・ 5を合成し、我々が見出した新加硫系を用いた自動車 燃料ホース外層向け配合に適用した場合の物性評価結 果をTable 8に示した。THVと強固に加硫接着が可能 であり、自動車燃料ホース外層材として目標規格を満 足した。

#### 5.まとめ

硫黄量を最適化したCSMと新加硫系(加硫剤にト リチオシアヌル酸、加硫促進剤にDBU塩、加硫接着 向上剤に酢酸ナトリウム3水和物を使用する)の組み 合わせにより、自動車燃料用フッ素樹脂製ホースの外 層への適応が期待できる。

#### 参考文献

- 1)日本ゴム協会編、ゴム工業便覧第4版、281
   (1994)
- 2) 亀澤光弘、ポリマーダイジェスト、46(12) 58
   (1994)
- 3) 佐藤保、東ソー研究・技術報告、45、59 (2001)
- 4) Y.Miyagawa, International Rubber Exhibition & Seminar April in India, Preprints (2001)
- 5) 亀澤光弘、ポリマーダイジェスト、46(9)、65 (1994)
- 6 ) T.Nakagawa, Internatinal Rubber Conference 1991 Summaries, 265 (1991)
- 7) T. Sato, German Rubber Conference 1994 Summaries, 145 (1994)
- 8)垣内大輔、小川泰道、安松一二三、特許2932980
- 9)NOC技術ノートNo.440、日本ゴム協会誌、70(8) 474(1997)
- 10)NOC技術ノートNo.441、日本ゴム協会誌、70(9) 534(1997)
- 11) NOC技術ノートNo.442、日本ゴム協会誌、70 (10)、594(1997)
- 12) **宮川泰道、岡山克成、烏田敏典、特許**3235137
- 13) 宮川泰道、岡山克成、烏田敏典、特許3203710
- 14) 玉虫文一、富山小太郎、小谷正雄、安藤鋭郎、高 橋秀俊、久保亮五、長倉三郎、井上敏、岩波理化 学辞典第3版増補版、496(1981)
- 15)玉虫文一、富山小太郎、小谷正雄、安藤鋭郎、高 橋秀俊、久保亮五、長倉三郎、井上敏、岩波理化 学辞典第3版増補版、495(1981)
- 16) M.J.O 'Neil, A.Smith, P.E.HeckIman, THE MERCK INDEX, 284 (2001)

	著者		著者		著者		著者
氏名	伊藤信行	氏名	弘中常雄	氏名	中 村 英 好	氏名	佐藤保
	Nobuyuki ITO		Tsuneo HIRONAKA		Hideyoshi NAKAMURA		Tamotsu SATO
入社	<b>平成</b> 3年4月1日	入社	昭和43年3月4日	入社	昭和43年3月4日	入社	昭和60年4月1日
所属	南陽研究所	所属	南陽研究所	所属	南陽研究所	所属	南陽研究所
	ゴムグループ		ゴムグループ		ゴムグループ		ゴムグループ
							グループリーダー

#### 39